

清のぐるり

永代美知代

(一)

紫メリンスの風呂敷包を抱へた右手の小指に、丸善インクの小瓶を釣して、少しく長めに穿いた濃い海軍色の袴の裾を、小さなフランス靴でハイカラにけさばきながら、物静かな若松町の小路をセッセツと歩いて來た芳子は、高砂館と看板を掛けた二階建ちの下宿の前で、クリーム色の洋傘をつぼめると、そこから斜向ひに二軒目の自分の家の格子戸を開けて、靴脱ぎの上にそつと荷物を置くと、お針つ娘の脱ぎ捨てた下駄や草履をよけるやうに腰掛けて、ゆつくり編み上げの紐を解きにかゝつた。

格子戸の開いた時から、次ぎの間の仕事部屋では、一同聞き耳を引立て、居たが母の勝子は「どなた？」と聲をかけると一緒に、お針つ娘の起たないさきにと、急いで縫ひかけの紅絹うらを置いて、直ぐにも立つて行きさうに身構へた。

だが一體に此處のうちでは、主人の勝子が男まさりと云はれる程、テキハキした氣象の癖に、人一倍堅氣なたちだけあつて、同じ親類うちで、しかも寡婦暮しの氣安い同志でも、隣りの佐山のうちが年中賑やかに、此處いらの寡婦さん連や、氣輕な細君たちの集會所かと思はれる程、お客澤山なのに引替へて、めつたに來客のあるやうなことはなく、たまにあつたとしても、それは大抵代々木の方に嫁いで居る妹とか、實家の母親とか、皆な親類うちの、來た序に隣りの佐山へも、屹度聲をかけるとか、寄るとかして行くやうなお客ばかりである。

「私よ阿母さん。」

「オヤ芳かい、馬鹿に早いぢやないか。」とまた立てた膝を直して、縫ひかけを取り上げ、一寸と柱時計をのぞいて見て「まだお前、うちの時計は今やつと一時うつたばかりの處だよ、如何かおしなの？」

「早退けにして歸つて來ちやつたんだわ。」

「如何したといふんだねえ。」

「だつて私、破れるやうに頭痛がして來たんだもの、おまけに午後から數學の時間なんてやりきれないから、先生に斷つて歸して貰つたの。」

云ひ乍ら這入つて來た芳子は、一寸と手をついて「只今」とお針つ娘へ挨拶すると、其儘裁物板の傍に坐つて、左手の拇指と、眞珠入りの細い指環の筈つた中指を兩方の蟬谷に押し當て、さも惱ましさに顔をしかめた。

「またかい、困るわねえ。」

勝子は斯様した芳子の苦しさを容子を見ると、心配でたまらない。十年前良人の陸軍大尉に死なれると、引き續いて其忘れ形見の次女三女を亡くして、やつと長女の芳子一人をたのみに、母一人娘一人の心細いなかを、どうやら斯様やら十九歳の今日まで育てあげたので、平常から病身な芳子は、大事な上にも大事にかけられ、一寸とした風邪にも咳嗽にも、若しやして肺を病んで死亡つた良人の血をひいて、悪い病氣でも出はしないかと勝子の心配は普通一通りではない。だから芳子を女子大學の附屬高女に通はして居ても、又しても頭痛がする、齒が痛むと云つた風に缺席ばかりして、自然成績も好い方ではなく、二年に一度落第の割合で、まだやつと三年級なのだが、差當り學問で親兄弟を養つて行かなければならぬと云ふ身の上ではなし、相當な養子めつけて結婚

させるまでに、運よく卒業免状が手に入れば、まかり間違つてまさかの時の役にも立ち、小學校の教師せんせいをして、
も女の一生位は過ごせるし、萬更遊ばせて置くよりは氣慰みにもならう位の考から、勝子も八釜しく責め立て、
まで勉強に身を入れさせようとはしない。だが負け嫌ひな其氣象から芳子の成績の面白くないのを齒痒いつたら
しく、世間へ對して極りが悪く、肩身のせまい思ひのしないでもない。

「いけないのね芳ちゃん、それに頭痛は一等氣分に障るつて云ひますものねえ。」材木屋のお千代さんが此人の癖
の早口に云つて「うちの阿母さんも矢張り頭痛もちなものですから年中ぶら／＼してゐるんですよ。」

「さう／＼あなたの阿母さんとうちの芳と、本當に好い相棒ですよ。でもまだ心臓がお悪くないだけ、あなたん
とこのがましてすよ。芳はあなた、一寸と重いものをさげようものなら、もう息切れがしますしね、ちつと張つ
て御本でも讀みますと、直ぐ目の縁まぶたから頬へかけて、かうむくんだやうになつて、恐ろしく腫れぼつたい顔にな
つちやいますの、ですからあなた、學校も休んでばかり居ますしねえ、家に居たつて何一つしないで遊ばせて
置くより仕方ないんですよ。」

「うちの阿母さんだつて左様ですの、何かすると、あとから直ぐ病氣なんですもの、だから皆みんななて何もさせない
やうにしてますとね、私のは横着病氣だなんて、阿母さんたら自分でさう云つてますの。」

「本當にねえ、横着病氣だつて人様からさう思はれたつて仕方ありませんものねえ。芳なんでも遊んでさへすり
や好いんですよ。」

「うそよ阿母さん、幾ら遊んでたつて、やつぱり頭痛もするし、咳せき嗽せきも出るぢやないの、病身なんだから仕し様やうが
ない、そいだのに何か私わたしが假病かりびやうでもつかつてるやうなことを云ふんだもの、餘りだわ。」

「まあさ、お隣りのお姉あねさんなんど矢張り、私がお臺所だいどころのことから何かなにか皆みんななして、芳がたゞぶら／＼遊んでる



もんですから、よくあてつけに何か有仰つちや、芳ちやんは幸福だ、華族さんのお姫様みたいなものだなんて有仰るんですけれどもね、本人の芳の身になつて見ると、さう／＼樂でも御座いませんでせう、お宅のお慶さんのやうに御丈夫で家のお手傳ひが出来ましたら、私どんなにお羨ましいか知れませんでね、さう云つて御挨拶しときますの。」

「本當にねえ。でもお隣りの奥さんたら随分お慶さんの御自慢なさるぢやありませんか、あれで餘程お可愛いんですねえ。」

「そりやあさうですとも、清さんは繼つて見えてすし、お慶さんは何と云つても御自分の血のつながつた姪ですもの、御自分でも始終さう云つてらつしやる、清の世話になんぞならない、どうかしてお慶を一人前にしてお慶にかゝるんだつて。」

「まあ随分妙な方ですのねえ。」

「ナニね、あれでお腹んなかは案外さうでもない人なんですがね、兎に角一風變つた方の事ですから成るべく當らず、障らずであたいと思ふんですけれど、何しろ縁續きだつたりなんかして、さう云ふ譯にも行きませんしねえ——此頃はお仕事なんぞ持ち込んで大口はおきゝなさる。あなた方の手前もありますし、菅さんなんぞ随分いろんな事からかはれたりして、御氣の毒で堪らないですけども。」

「さゝえ。」

無口な音無しい菅さんが初めて口をきいた。此人は市ヶ谷邊のさる神主の娘で、近いうち嫁入りする筈なので、美しい綺麗な髪を品の好い文金の高島田に結つて、此の頃は毎日白無垢のかさねや、友禪の長襦袢などを縫つて居る。

「本當にあなたにお氣の毒で、私をばて聞いて、はら／＼しますの、あの通りの人で、深い考があつてお云ひなさる譯ぢやないんですけれども、一寸としたことが堪らなく羨しかつたり、やけたりなさる性分らしいんですねえ。そんなに羨しけりや、いつそ御自分で再縁なさると好いんだけど、まあま色狂人つて云つたおつもりで、あなた餘り氣にさへないで下さ。」

「えゝえ、何とも思つてやしません。」

「實際うちなんか這入つて來られると、ぞつとする程嫌なんですよ。」

「阿母さん、聞えるぢやないの、壁に耳ありですよう、御注意なさ。」

「好いんだよ、今日は留守なんだもの。」

「アラ左様、まあ好かつたこと！道理で静かだと思つたわ、けども何處へ行つたんだらう、お慶さんは？」

「一緒さね、下谷の佐藤さんだつてものお前。」

「また！随分よく行くわねえ、つい此間も行つたぢやないの。」

「矢張り奥さんが御病氣で、此節はお雪さんが會計から何から、すつくり握つてるんだつてから、そのせゐかも知れないよ。」

「お雪さんてお妾？」材木屋の末っ兒のお素さんが、いつものキョトンとした調子で訊く。

「馬鹿！お慶ちやんの阿母さんぢやないか。」

周章て、妹を叱つて置いて「お隣りのもお雪さんも、皆な佐藤辯護士の御姉妹なんですわねえ奥さん。」とお千代さん。

「だつて腹違ひとか種違ひとか、本當の兄妹ぢやないから、幾ら威張つて御自慢したつて駄目なんだわ。」

「駄目つてこともないでせうけどもね、佐藤さんとお隣りのは餘り氣が合はないとかで、碌に世話もしないもんだから、お兄さんが御死なぐさ去りなすつてから、あゝして再縁もなさらないと云ふし、代々木の方ですつくり面倒見ることになつてゐるんですよ。」

「まあ左様ですかねえ、私には何でもお慶ちゃんおんの養育料として、佐藤さんの方から随分仕送つて來るらしいお話でしたよ。」

「うそですよ、來た所で精々五圓ごまが關の山やまでせう、娘一人引受けてどうして損な位ですよ。それにお慶お慶つて、まるで清さんはありなしてすものね、代々木だつてお慶ちゃんをあゝして預つて置くのは不賛成なんですよ。」

「全く清さんがお可哀相ですわねえ。」

「一寸と誰れか來たやうよ黙つて、御覽なさい、噂をすれば影つて云ふから、若しかしたら清さんかも知れないわ。」

「お隣りの格子戸のやうかい。そいぢや屹度さうかも知れない、お前一寸と行つて開けておあげな。」

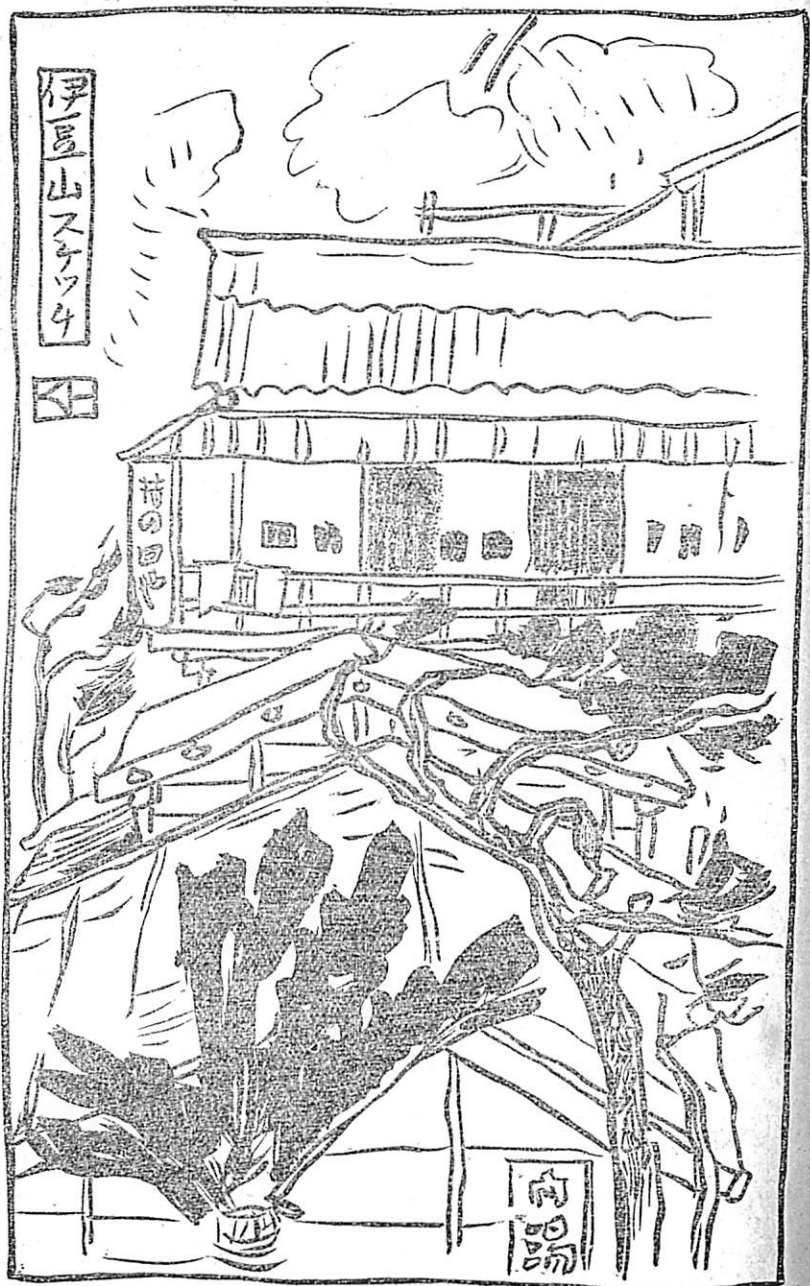
勝子が針箱の中を探して、預つて置いた鍵を見つけて居ると、表の櫺子窓のところの障子を開けて、第四中學の制帽を冠つた清が顔を突出した。

「オやお歸んなさい、阿母さんも皆みんなな佐藤さんへお出掛けて御留守ですよ、いま芳に開けさせますから、まあ一寸とお上んなさいよ。」

「難有う、僕友達と一緒に來ましたから、鍵だけ頂いて行きませう。」

「ぢや芳早く！」

芳子は鍵を持つて出て行つたが、清の友達と云ふのも皆みんなな、よく佐山の家で出會つて知り合つた顔ばかりなの



て、誘はれて一緒に茶の間へ這入つて行つた。

やがて筑前琵琶が始まつて、友人の一人が得意の曲を演じた後で、豫て斯の道に浮身をやつし、其癖性れつき調子外れな清が、妙な聲を張り上げて、ドツと一同を吹き出させるやら、唸る聲笑ふ聲、それは賑やかなことであつたが、しまひに芳子は清を使者に、うちからバイオリンを取り寄せて、得意な咽喉と音色に、うつとり酔つたやうな清を始め、その友達を無暗に喝采させ、高砂館の二階の横手の欄干にもたれて、先刻から開け放した茶の間の内を見下して居た書生連から、時々よう／＼など、聲をかけられたりして居た。其書生連の中には豫て芳子のハイカラ姿に眼をつけて居る早稲田の學生もあつて、薄々それと氣のついた芳子は、わざと蓮葉に睨みつけたりなどした。

「何て騒々しいんでせうね本當に。」

隣りのうちでは、折々勝子が斯様云つて眉をひそめたが、別段芳子を呼び立て、迎ひにやるでもなかつた。

(二)

清は芳子より一つ年上で、今年廿才なのだが、疲せてこそ居れ身丈も高く、それに亡くなつた父親に似て、何處となくものやさしく、至極大人びて見えるのであつた。だが如何云ふものか學校の成績はよくなって、又しては落第々々と、まだやつと第四中學の四年級なので、父親のなくなつた後、學資萬端の世話を引受けて居る叔父の胸を痛め／＼した。

其癖なくなつた父親と云ふのは漢學者で、教育にかけては恐ろしく嚴格な方で、かけがへのない一粒種にもかゝらず清は随分きびしくされて、幼い時分から學校が退けると直ぐ父親の前に坐らせられ、史記十傳や名家文範の素讀をおぼえないと云つて、いやと云ふ程煙管で頭を打れたり、夜は夜で、懇意な數學教師をたのんで、每晚其處へ通はせられたりしたもんだ。父親も叔父も學資の乏しい中から、殆んど獨學で皆それ／＼相當に世に出た程だから、系統から云へば清も一通り出来なければならん筈なのだが、清の母親といふのが難産で死んで、醫者たちが寄つてたかつてやつと清だけを無事に引き出した位で、性來頭腦が如何かなつてゐるのかも知れない。

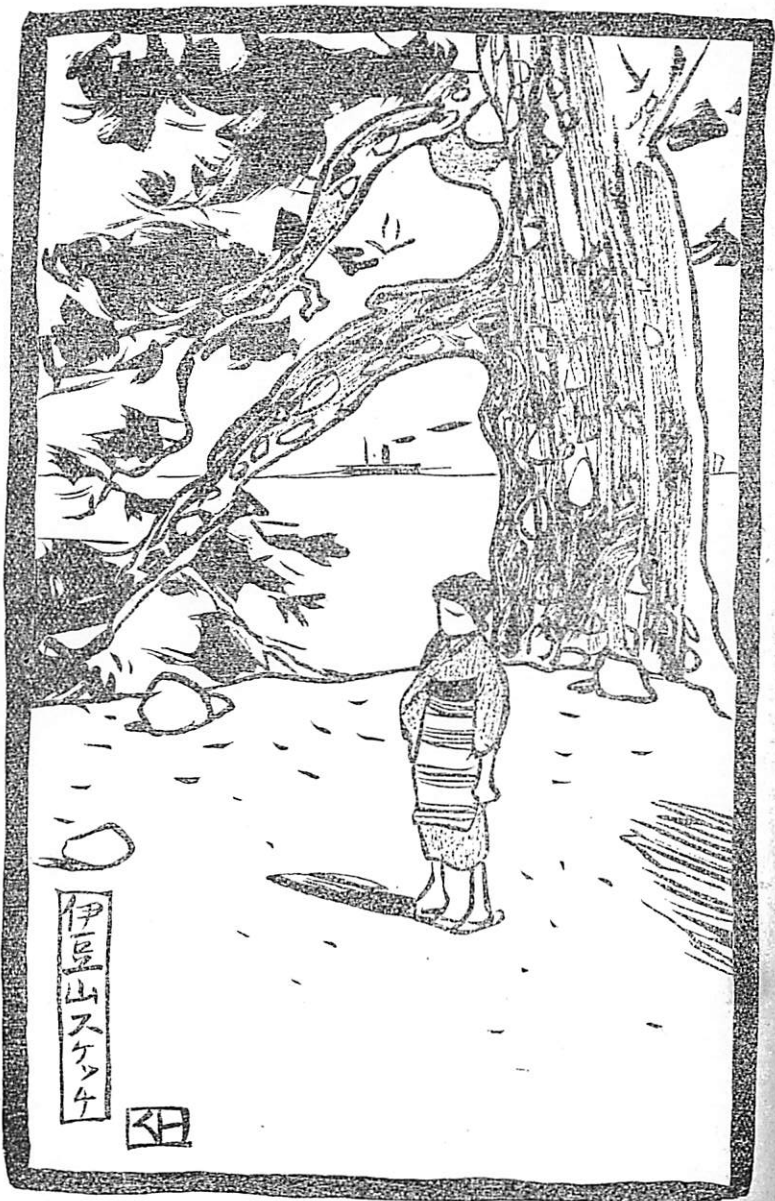
叔父の佐山鐵彌は可成り名前の知れた學者で、自分の傍に寄つて來る青年のどれもが、皆それ／＼秀れて居るのを見るにつけ、甥の清が如何にしても愚物で、仕方のないものに思はれて、失望せずには居られなかつた。なくなつた兄が臨終のきはまで、呉れ／＼頼んで逝つた言葉もあり、現在肉親の甥である以上、如何にかして一塵のものにして見たい。と斯様最初のうちは一生懸命、いろ／＼に骨折つて見たが、しまひには日曜毎に來客の取次ぎと云ふ名義で、遊び半分手傳ひに來させることにして居た清の顔を見たり、聲をきいたりするのも忌々しく思はれた。落着いて居るのだと云へばさうも云へようけれど、何を問ひかけてもあど／＼と、碌ずつ返事もし得ないやうな、うじ／＼した其煮を切らない様子は、せつかちて聞かぬ氣の叔父を焦立たせ、吐き出したいやうに嫌つて、何でもないことを話し合つて居るときでも、如何かすると、清のいふくて細い眼を見ると、鐵彌は自分まで氣が遠くなるやうな心地になつて、云ひしらず不快を感じるのであつた。

鐵彌がさうした態度を見せれば見せるだけ、清は猶更いぢけて、成るべく叔父を避けるやうに、學資や書籍代を貰ふにも、餘り自分に同情して居て呉れさうもない、他人の叔母の須磨子を通して云つて貰ふやうにした、それがまた叔父の氣に入らない。鐵彌は遠慮ない氣さくな芳子を愛して、芳子がねだるまゝに日光へもつれて行け

ば、指環だバチン止めだと、高價なものをも買つてあたへた。
 「芳ちゃん本當に得な性分だよ、現在肉親の甥なんぞ其處のけて、叔父さんには可愛がられるしさあ、容色はよし、學問はある、様子はよし、おまけに愛嬌者と來てるから、彼方からも芳ちゃん、此方からも芳ちゃんて、羨ましいねえ、まるで引張風だがね。」

斯様したあてつけを清の繼母のお里に云はれて、勝子はいつそ氣を悪くしたが、さればと云つてお里は、清が叔父の鐵彌から可愛がられないのを残念に思つて居るのでもない。清とお里の仲は父親の在世中から、ついぞ母子らしい親しみもなく、お里は嫁つた當座いぢめぬかれた姑の祕藏の兒であつた丈に、清に對して餘り好い感情をもつことも出来ない。それを亡くなつた父親が心配して、お里の妹のお雪が子供をつれて嫁入り先きを離縁になつた時、行く／＼清にめあはしたらお里との折合も圓満に行くだらうとの考から、引取つて世話したのでないまのお慶で、それ以來お里の愛はお慶にばかり注がれた。父親が亡くなつた時、愈々お里が實家へも歸らぬ、再縁する氣もない、此儘寡婦を立てると、さう事が定ると、お里に清とめあはず氣がないと云ふお慶を、いつまであゝして世話して置いた處で仕方ないと云つた故障が、清の母親の實家方に當る新町の祖父から始めて、親類うちで云ひ出されたが、けつくお雪から幾らかの養育料を取るからと云ふので、其儘預ることになつたのである。幼い時から一つに育つたゞけに、清もお慶も一通り親しい情愛を持つては居るが、無口でかあゆげのないお慶よりも、如才のない賑やかな芳子の方が餘計なつかしいやうに、此頃の清にはさうも思はれて來た。

さうしたことには人一倍眼の早いお里は、直ぐ清の氣持ちをあうも斯様もと推しはかつて、須磨子や勝子に清が芳子に戀して居ることをほのめかし、若い同志のことだから芳子を氣をつけて、間違ひのないやうにして貰ひ度いとまで云つて見たが、芳子を信じ切つて居る勝子は、けつく怒つて、芳子に限つてそんな事はない、それだ



伊豆山スケッチ



けは自分が受合つても好いと、斯様した立派な口をさくし、それを聞いた芳子は芳子で、「人を馬鹿にしてる、そんな事云ふなら餘計清さんと交際して、うんと氣をもませてやるんだ。」と勝子のとめるのもさかないで、殊更ら清を誘つて、縁目を並んで歩いたり、郊外散歩に出掛けたり、お里の前もかまはず清にふざけかゝつて見せたりした。

最初一月二月は流石のお里も本氣に氣をもんで、妬いて見たり、勝子にあてつけを云つて見たりさせられて居たが、しまひには狂言だと知つて、馬鹿々々しくも思つた。

それは或る時、ふだんから懇意にして居る同じ寡婦さん仲間のさる家を訪ねると、お里は學校に行つて居なければならん筈の芳子と、ヒョククリ落合つた。

「アラ小母さん！」

うつかり隠れそこなつた芳子の周章てた様子は、てんでそれまで氣付かずに居たお里にも、此處の家に同居して居て寡婦さんと關係して居る人の弟のバイオリストと、わけのあるらしい事が直ぐ讀めて、歸りに其處を一緒に出ると、お里はいさなり芳子の脊中を叩いて、

「甘くやつてるぢやないか、本當に凄いいねえお前さんは、好い年して居ても私なんぞ足下へも寄付けないよ。」と云つた風に、冷かしたり詰つたり、到頭清との一件は狂言だと白状させたのである。

「愈々喰へない人だねえ。」

お里は心から呆れて了つた。

「私の家の息子を散々おもちやにしたりして、お前さんも餘りだ。可哀さうに清を如何してお呉れなんだよう。今更狂言だなんてお云ひのなら、今日の一件をすのくり阿母さんに云つ告げるから左様思のといで。」

斯様お里が眞顔で云ふと、芳子は蒼くなつて心配した。散々いぢめてくお芳子を泣きついて頼ませたする、お里は笑ひ出した。

「うそだよ芳ちゃん、若い者をいぢめたりなんぞ、私もこれでそんな野暮ぢやないから安心おし、屹度阿母さんにや何も云はないで内證にしてあげますよ。」

「まあよかつた！」芳子はホツとして、仰山に両手で胸を撫で下した。

「だけれども芳ちゃん、本當に罪だ、後生だからもう清にかかふのだけはよしとくれよ。可哀さうに奴さん夢中だかね。」

「だつて急にそつけなくも出来ないわ。あんなに親しくしてたんですもの。」

と芳子の云ふのを聞くと、お里は折角見かゝつた面白い幕を、これきり打ち上げにするのも、残り惜しい氣がした。

「さうさねえ、これまでがこれまでだから、餘り打つて變つた様子を見せて、氣がふれてもされると大變だからね、まあ／＼精々仲よくして、好い加減にあやつるさ。」けしかけるやうな調子で、こんな事も云つた。

それからと云ふもの、芳子は間がな隙がな隣りの佐山の家へ入り浸つて、好きな煙草をこつそり買つて、お里から借りた煙草入れに藏つて置いては、母の勝子が夢にも知らん間に、だらしない寡婦さん連の仲間に交つて立て膝の長煙管で煙を輪に吹くことを覺えたり、ちよいちよい此處の家へ顔を出すやうになつた、例の寡婦さんの家に居るバイオリストと出會つたりした。

世話好きな父親の生きて居る頃は、始終書生の二三人も預つて、茶の間には年中來客の絶え間もなかつたが、親類の世話で暮さなければならんやうになり、住み馴れた以前の家を引拂つて、一昨年此處へ移して來てからと

云ふもの、佐山の家も幾らか人出入りが少くなつた。だが若いものや近所の寡婦さん連は氣が置けないだけに、好い遊び場所のつもりで、相變らず賑やかに話し込んで、隣りの勝子を真似て、折角お里が内職に始めた人仕事もねつから抄取らず、長火鉢の側の公孫樹の裁板の上には、十日も其上もくしやく／＼になつたやうな同じ布切が置かれてあつた。

「何ぢやぬ、人がしらないと思つて、たんとおふざけな。」

と例のバイオリストと芳子に溶せる、意味ありげなお里の眼付も、平常から誰れにでも若い男女には斯様した調子なのを見馴れ聞き馴れた清は、勿論自分が芳子にからかはれて居ると氣の付く譯はなし、別段變に思ふやうなこともしなかつた。だがつい此頃まで輕蔑し切つて居たお里に名染んで、如何にも親しさうにする芳子の心を測り兼ね、獨りて煩悶して、教科書の勉強はあるか、好きて始終寫して居た筑前琵琶歌の本をひろげる氣もなく、毎日々々猫化けのやうに騒々しい家のなかで、芳子の一言一行を氣にしながら、試験前だと云ふのに、只徒らに頭を亂して暮した。

「芳ちやんは急に母さんと親しくなつちやつたんだね。如何したの？」

「好いわそんな事云つて、私が餘り行くもんだから、貴君うるさくなつたんでせう。よござんすよもう行かないから。」

訊うか訊くまいか散々思ひ亂れて、やつとの思ひで、そつと打ち出して見ると、ふいと拗ねられて、

「そんな事誤解だよ。後生だ、氣にしないでね芳ちやん！」

「だつてもう好い加減に勉強しないぢや、お互に落第するつとまらないわ。」

芳子はめつたに清と顔を合せないやうにした。清だつて試験をあとひ、叔父の手前を考へると、立つても居ても居られぬやうな氣がするが、さればといつて教科書を讀んでも、何を讀んで居るのか上の空で、壁一重でしきられた隣りの客座敷が、ふだん芳子の勉強部屋になつて居ると思ふと、矢鱈に神経がたつて、其方ばかり氣がよつて、清は毎晩のやうに机を睨んで、聞耳を引立てた。

(三)

荒井の家では井戸屋を備つて、又裏の掘井戸をかへさせたりした。つい此間の春季大掃除にかへたばかりなのだが、高砂館の遠縁に當る婆さんとか云つて、暫く下宿の臺所などを手傳つて居た、恐ろしく腰の曲つた、汚ならしい様子の六十過ぎたのが、如何云ふ理由なのか、身を投げて死んでゐたので。

早起きの勝子が空が白むと直ぐ井戸端へ出て、いつものやうに何の氣もなく井戸繩に手を掛けると一緒に、ふと中をのぞくと、井戸一杯黒いものが浮いて居た。氣丈なたらだけに、驚ろいて聲を立てるやうなこともしなかつたが、佐山の裏口へ廻つてお里を起しに行つた、其脚はぶる／＼顫へるのであつた。清が交番へ駈けつけて、檢視も無事に濟んだが、勝子は頻りに胸騒ぎがして來て、何か凶事がある前兆ではないかと、さうした事を苦に病んで心配した。

だが其心配も無理ではない。これが自分の持ち井戸でなくて、他人の貸家にも居るのなら、お里を初め此處いら近所の人達と同じに、高砂館のあしらひが悪かつたからだらうとか何とか、婆さんの身投げに同情した噂さで持ち切つても居られようけれど、良人の遺していつた僅かばかりの小金をもとに、散々身をつめて殖やした財産で以て、折角思ひ立つて建てた此の三軒長家の家作に附いた掘井戸なので、假令縁もゆかりもない赤の他人の

婆さんにもしろ、身を投げて死んだりされると、全くけちを付けられたやうな氣がせずには居られない。勝子は昔し自分が田舎に住つて居る頃、村の金持ちの物置の梁へ細帯をかけて、雇ひ婢が首を吊つてから間もなく、其家の繼嗣息子が病ひついで死んだことを思ひ出し、ぞつとして身顛ひした。

「若しかしたら、芳が落第するのもかも知れないよ。」

斯様も考へたが、それならそれで、芳子の失望を見るのも可哀相だけれど、せめては同じ凶事のうちなら、まだしもあきらめもつくと思つた。夜遅くまで芳子が座敷で勉強して居ると、勝子は行火をこさへて、着せかけてやつた小夜着の下から脊負せたり、平素芳子の好きなそばかきを熱くして持つて行つて食べさせたり、一寸とした嚏一つにも恐ろしく氣を揉みくした。

だが芳子の試験も無事に通過つて、寄宿舎の友達から及第を知らせて寄越した葉書が届くと、結果を案じて内々悄氣で居た芳子が急に元氣付いて、勝子も一緒に、お目出度うを繰り返へすお針つ娘を相手に、何でもない事にまで事々しく笑つて、陽氣に騒いだ。

「何ぢやね、珍らしいぢやないかね、阿母さんまでが一緒になつてさ。」

生憎相客もなく淋しくて居たお里は、堪らなくなつて引張り出された氣味で、縫ひ掛けの仕事を持ち込んで、仲間になつたが、それと聞いて、

「さうかね、道理で阿母さんが陽氣だと思つた、何しろお目出度いわねえ、何かお奢りよ芳ちゃん。」

「アラ小母さんたら慾ばつてるわねえ、お祝ひも寄越さないでさ。」

「だつて身祝ひぢやないかね、ねえ皆さん、芳ちゃんも奢らなさいやうそですわねえ。」

「どんなに云ふなら、小母さんの好きな焼芋でも、一袋だけ奢りてあげてよ。」

「フン、馬鹿にしてるよ。」

一同はまた吹き出した。

午後から暫く振りに代々木の佐山へ、泊りがけて行つて來ようかなど、芳子が云つて居ると、バラ／＼俄かに雨が降つて來た。勝子は周章て立つて、いつものやうに臺所の引窓の戸を閉めようとすると、麻綱の紐がちぎれて、はずみて板の間へ轉ぶと、米櫃の角で嫌と云ふ程横腹を打つた。

「如何かして？え阿母さん！」

茶の間から斯様芳子が聲を掛けた時には、勝子はまだ起き上ることも出來ないで、横腹を壓へて、やつと痛みを堪へて居た。

「とんだ御災難ですのねえ。」

芳子を手傳つて座敷へ寐床を敷いたり、いろ／＼介抱して呉れた菅さんだの、お千代さんだのが見舞を云ふと、

「でもまあ試験も及第しますし、凶事が芳に來ないで、私の怪我位で済んでよござんした。」と勝子は、自分の痛みも忘れて、晴々とした氣持ちで云つた。

打身の痛みが幾らか薄らぐと、一體に丈夫なたちの勝子は、寐て居る氣がしなかつた。直ぐにも起きて出て、臺所を立ち働かうとしたけれど、芳子は無理に寐かして、平素仕馴れもしない水仕をしたり、朝早くから手桶をさげて、井戸端へも出掛けて行つた。

「お姫様のお雑仕か、でも感心によく働けたもんだねえ。」

お里は尻端折で、甲斐々々しく働く芳子の姿を見かけると、垣根越しに家の中から聲をかけて驚ろいた。勝子

「うそ、佐山の小母さんが餘計すつたんですからねだ。」

「何だ嫂さんが來てるのか。」

「え、清さんがお金を貰つて歸らないもんだから、そめや心配して、持ち逃げされると大變だつて、うちへ來てさう云ふんですもの、だから私一緒にどんな様子だか見に來ちやつたの。」

「今一寸と新町へ行つてらつしやるんですがねえ、清さんが落第なんですつて。」

「フン、さうだらうと思つてた。」

鐵彌の眼は鋭く光つた。

「だつて可哀相だわねえ。これから彼の人如何するんでせう。」

「二年續けて落第だと、もう其學校に居れない規則だつて云ふぢやありませんか、ねえあなた、何處か好い心當りの學校がおあんなすつて。」

「そんな事知るもんか、どうせあんな奴何處か給仕にでも投げ込んぢやへ、仕方のない低能兒だ！」

鐵彌は清の事を思ふたび、いつそ死んぢまへと云つた氣になる。

「だつて清さんだつて可哀相だわ、毎朝々々小母さんが朝寝坊ばかりして居て、清さんが起きたつてお茶も沸いてないんですもの、冷い御飯へ水をかけて頂いて、頓へながら學校へ出掛けて行くつて風なんですものね。」

「お茶位自分で早く起きて沸すが好いぢやないか。」

「だつて其爲めに嫂さんてものが附いてらつしやるんでせう。後からまたお寝なさるとしても、せめて清さんの學校に間に合ふやうに、あつたかいお味噌汁位食べさせて出すやうになされば好いのに。」

「併しまあ朝寝坊位寡婦さんだもの、許して貰ふだけの特權はあるさ。」

「だつてさう云へば荒井の姉さんだつて寡婦さんだけど、人一倍早起きぢやありませんかね。」

「荒井の姉さんにや可愛い芳ちやんてものもあれば、お金と云ふ楽しみもあり、嫂さんと一つにや行かないさ。」

「だけでも本當にあれぢや清さんが悲惨だわ。いつそ寄宿舎へても入れると好いんだけど。」

「ナニ如何したつて駄目さ。奴あ産れる時難産でね、後頭部に傷があるだらう、其處へ鍵を引かけて、やつと引張り出したんだもの、どうせ馬鹿なんだよ。」

「ですから猶可哀相ぢやありませんか、ねえ叔母さん、些少も自分のせむぢやないんだもの。」

「本當にねえ。」

鐵彌がむつかしい顔をして考へ込んだので、一同しんみりと黙つてしまつた。

「嫂さんでせう、随分手間取りましたねえ、清さんどんな風？」

裏門を開けてコチコチ庭を歩いて來る下駄音を聞きつけ、かう須磨子が聲をかけると、裏縁を上りながら、「どんな風つて、こんな風つて、どだいお話にも何にもなりやあせんがね。」とお里は障子を開けるなり、吹き消した提灯を何處かそこいらへ懸けようとして、ふと長火鉢の向うに坐つて、此方を見て居る鐵彌に氣がつき、「オヤお歸んなさい。」といきなり其處へ手をついて「實はねえ、昨日あたり是非頂いて歸らなきやならん筈のお金を、清が持つて歸らないもんですから、今日終日待つて待つて待ち暮して、又さうでもない、折が折ですからねえ、持ち逃げでもされようもんなら、それこそ後で申譯がないと思つて、夕方から伺つたんですが、新町の方に居るつてお話だから一寸と彼方へ行つて見て來ましたの。」

「さうですつてね、奴さん居ましたか。」

「え、居るには居るんですけども、病氣であなた、奥の間へ寐かしてあるんですよ。」

「假病だらう。」

「まさか。」

芳子と須磨子が同時に云つて、迂散臭い眼付で、鐵彌とお里の容子を見比べた。

「いゝえ、實は私も行つてお祖母さんからさう聞いた時、若しやと思つたんですけども、本當なんですの、おまけに甚い熱でねえ。」

「アレまあ如何したと云ふんでせう。」

「ナニ大した病氣ぢやないさ、落第を云ひ出せなくて、それがばれさうになつた心配から來てるんだもの。」

「でも可哀相だわね、新町ぢや皆な大心配でせう。」

「そりや云はなくなつて、お祖父さんお祖母さん二人共泣きの涙ぢやがね。私は何もお知りなさらぬ二人がお可哀相になつて、つい一緒に泣かされて來ましたさ。それなのに清つたら憎らしいねえ、まだお祖父さんお祖母さんを欺かして、及第したやうに甘く云つてゐるらしいんですよ。そりやあ去年の今年だもの、また落第しましたあ、幾ら何でも云ひ難いにや定つてますけども、落第したものは仕方ないぢやありませんか、いつ迄もくあゝしてお老人を欺かして置いて、後から落第させちや猶罪ですわ。學校から來た手紙ね、ソラ報告書とか云つたねえ芳ちやん、それが丁度清が此方へ上つてる留守に届いたもんですから、開封して見ますとね、免狀式までに改めて入學の手續きをしないと、退校させるからつて、さう云つて來てるんでせう。私はそれを清に知らせとかないと悪いと思つてねえ、云ひかけると、傍にお祖父さんがついてらつしやるもんだから、清つたら、兎に角僕明日歸つて行きますからつて、如何しても私に云はせないんですよ。尤も自分ぢや大抵學校から何て云つて來た位、ちやんと胸に解つてゐるんでせうけどもね、それを又私が免狀式免狀式つて云ふもんだから、お祖父さんと

お祖母さんと二人が勘違ひして、本人は明日歸つて行くなんて云つてるけれど、如何して此熱ぢや動かさせないし、とても明後日の免狀式へ出席出來さうもないから、誰か近所の清の友達を頼んで、免狀だけ受取つて來て貰ひ度いつて、繰り返し／＼呉れ／＼お頼みなさるんでせう。お可哀相に一生懸命清に欺かされてらつしやるが、免狀なんか何處で下るもんですかと思ふと、お氣の毒になつて、本當に私御挨拶に困つて了つて、好い加減に逃げ出して來ましたの。」

「併し落第のことは打明けて來たんでせうね。」

「いゝえそれがさ、お祖父さんお祖母さんが免狀免狀つて、一生懸命それを有仰るし、清の方で些少も打明ける氣がないですもの。」

「ぢやあなたも清と一緒に、老人の前を好いやうにばつを合せといて歸つたんだね。」

「だつて定めし落膽なさるだらうと思ふと、いた／＼しくつてあなた、まさか免狀なんて下りつこありませんとも云ひ出せないぢやありませんか。」

「本當にね、いつそあつさり清さんが云つちまふと好いんですにねえ、でもお金はお受取なすつて。」

須磨子は急に氣がついたやうに、お茶をいれかへて皆なにすゝめた。

「え、受取つて來ましたがね、ちやんと自分の枕の下などに藏ひ込んで、お祖父さんにもお祖母さんにも、些少もお金なんぞ持つてゐることを知らしてないかしかつたですよ。」

「奴さん、其金を旅費に何處かへ行くつもりで居たのかね。」

「まあどうも様子がさうらしいんですねえ。」

「此間からね、何故叔父さんに打明けて相談しないのつて、そつと忠告するとね、僕にも多少考へてることがあ

るからつて、そんなこと云つて、よ。」と芳子も口を添へた。

「だがそれだけの決心も、一寸と奴にやむつかしからうよ。」

「でも切羽詰つて来りや、どんな無分別しないとも限りませんよ。」

「ナニもう大丈夫です、肝心な旅費を取りあげたから、どうすることも出来やしませんさ。だけれども私、明日から歸る歸るつて、あの熱でうちへ歸つて来て、ドツと寝付かれてもすると困るがな。」とつい辯で、仰山に顔をしかめて見せる。

「だつてそりやあ仕様がな。母子となつてゐる以上、それ位の世話はしなくつちや。」

「ナニね、それを厭つた譯ぢやないんですがね、何しろ甚い熱でせう、新町からうち迄つて御覽なさい、牛込の奥ですからねえ、風に當るとよくないでせうと思つて。」

鐵彌の皮肉つた言葉にギツクリして、お里は周章で、云ひ譯をした。

「いつまで新町の厄介にもなつてゐられないが、併しお祖父さんお祖母さんが一寸には離すまいから、暫くあのまゝ預けて置くのも、けつく好いかも知れないね。」

「それにどうしたつて親身ですものね、だから私お世話を願つた方が病人の爲めかと思ひますの。」

「まあ、そんな事はどつちでも好いさ。どうですもつと火の傍へお寄んなすつちや。寒いでせう。」

「いゝえ、私も歸つて行かなくちやなりませんから。」

「さうですか、併しまだ好いでせう。」

「それに今夜は芳ちゃんと言ふ別嬪の娘をつれてますから、餘り遅くなつて出齒龜にでもつけられると大變ですもの。」

「あんなこと云つて小母さんたら、御自分がめつたに持ちつけもしないお金を持つてるもんだから、それが心配で堪らないのよ。」

「失禮な、餘り人をおみくびりでない。サアサアそれよりか早くお仕度なさい、お須磨さん先刻の提灯を拜借ね。」

「え、えお持ちなさいとも。」

「お、嫌だ、そんなもの持つて、電氣のついた明るい東京の街へ歸つて行けますか。およしなさいつたら。」

「だつて電車迄が暗いぢやないの、私はこれで大金を持つてる體ですよ。」

「ソレ御覽なさい、やつぱり泥坊が恐いもんだから。些少ばかりのお金にびくついて、本當に貧乏人つたら仕様があまりやしない。」

「何だつて此奴め！」

「ホ、相變らず暢氣なことばつかり。」

須磨子は笑つて見て居たが、鐵彌は氣のない顔をして、ボンヤリ洋燈の灯に見入つて居た。

も芳子に斯様した勝手元が上手に出来ようとは思ひ掛けなかつたが、芳子はコチコチと五目ずしなどをこさへて病人を喜ばせた。

「どうだい清さんは、うまく通過つたやうかい？」

「どうだか、何だか情氣でよ。」

「去年もいけなかつたんだからねえ、せめて今年は及第にさせたいもんだが。」

勝子は寐て居て所在のないまゝ、清のたよりない身の上を思ひやつたりなどして、芳子を相手に話し合つた。だが其結果の知れないさきに、清は叔父の家で何かいそがしい手のいることがあるからと云ふので、豫て春休暇にはと約束してあつたため、手傳ひにと代々木へ行つてしまつた。併かし清は成績の発表を待つまでもない、代數の答案を白紙のまま差出した程で、自分ではもう所詮駄目なことを知り切つて、叔父に訊かれたら、如何云つたものかと、氣が氣ではなかつた。

だが學校からの通知で、清の落第は間もなくお里に知れた。お慶から讀んで聞かされた通知書を握つて、お里は勝ち誇つたやうな様子で、早速荒井の家へ吹聴に出掛けたが、来る程の客を捕へては、清の意氣地のない話から、兎角思ふやうには世話して貰へぬ親類の不足を並べ立て、自分の身の上のたよりなさを、如何にも心細くつて堪らなさに、こぼしこぼしするのであつた。

「いつそ御再縁なすつたら。」

少し云ひ過ぎるかと思つたが、聞き兼ねて勝子は斯様も云つた。

「私もねえ、良人で餘りやさしい好い人だつたもんだから、忘れられないで斯様して寡婦を立て、居るやうなもの、良人のやうなやさしいのがあつたら、も一度位嫁つて見ても好いと思つてゐるんですよ。里や、お前それぢや間違つて居ないかい。」

お里が猫撫で聲で、死亡つた良人の口眞似をして、いつもの癖のだらしないおのろけを始めかゝつたので、如何して斯様かと呆れながら、勝子は黙つて了つたが、心の中ではお里のやうな女をいつまであゝして世話して置かうより、いつそ離縁にして了つたらよさうなもんだ、お里から離して寄宿舎へも入れた方が、清の將來にとつても幸福だらうにと、鐵彌の處置をはがゆつたらしく思つた。

芳子は清が如何云つて落第を叔父に打ち明けたらうかと、其後の消息が知り度くつて堪らない。幸ひ勝子の怪我も輕かつたのか、二三日引籠つて用心して居るうちに、碌すつば醫者にかゝりもしないで、もうすつくり快くなつたと云つて、勝子が床をあげると、芳子はいつものハイカラを、水髪の桃割に結び代へ、お白粉も少々濃めに塗つたりして、自分の及第を吹聴がてら、何か面白いものでも見物に行く氣で、いそぐ代々木へ出掛けて行くのであつた。

「何だ、甚くめかし込んで來たぢやないか、學校は及第だつたらしいね。」

いきなり叔父から浴せられて、

「え、御蔭様で。」と芳子は澄して云つたが、得意の色はかくし切れなかつた。

「さうかそれはよかつた。清は如何なんだい、又落第か。」

「サア、如何ですか、まだ成績を發表しないんでせう。」

叔父がまだ何も知つてないと解つて、芳子は流石に打ち明けても云ひ兼ねた。鐵彌は情氣返つて元氣のない、うじ／＼した清の様子を見ると、如何かと思ひながら、面と對つて訊くのが嫌で、つい延び／＼に先方から云ひ出すのを待つて居た。

其日は折悪く何かの會で、佐山の家では五六人の客が集ることになつて居て、一人二人顔が見え出すと、鐵彌は座敷へ出て了ふし、芳子はいつものやうに、長襦袢一枚の片肌脱ぎで、聞き覚えの義太夫を語つたり、踊りの真似をして騒ぐことも出来なかつた。

買物か何かのお使から歸つて、茶の間にボンヤリ坐つて居る芳子を見ると、清は不安の胸ををどらせた。

「叔父さんに黙つて、お呉れ、後生だ！」

「面白いわ、どうせ私はそんな意地悪に見られてるんだから。」芳子は面白くない顔をして歸つて來た。

(四)

日がな終日泣くやらわめくやら、散々騒ぎ廻つた五人の兒童等も、皆それ／＼寝付いてしまつて、其處いら一杯取り散らかされた玩具のやうなものから、脱ぎ捨てのちやんちやんだのシャツだの、すつくり仕末されて、一通り佐山の家の茶の間の片付けも済んだ夜の八時半にもなると、代々木山谷の此處いらあたりは、もうひつそり閑としてしまつて、四丁も離れた新宿や代々木停車場で鳴らす汽笛と、甲武線山の手線の電車汽車と、そんな音ばかりがあざやかに聞えて來る。

「また何處か屹度泊り込んでるんだよ。」

幾度となく茶の間の柱時計を見上げて、夕方から來て居る芳子を相手に、妻の須磨子が頻りに不安の胸を焦立たせ、こぼし／＼た九時過ぎ、佐山鐵彌は其勤めささがお役所でないだけに、節糸の着物に真綿の吹いた蚊紵銘仙の羽織と云つた、くだけた身装の勤め着て歸つて來た。

「遅いわねえ、叔母さんがどんなに妬いて、氣をもんでたか知れなくつてよ。」

氣輕な芳子は直ぐ起つて、長火鉢の前に今迄自分が敷いて坐つて居た座蒲團を、手早く裏返へし、其處へ叔父を招じた。

鐵彌は黙つて只莞爾々々笑つて居る。赤い顔の眼元もとろんとして、酔つて居るのが直ぐ解つた。でも須磨子はわざと知らんふりて、

「あなた御飯はッ」

「もう濟んぢやつた、お茶だお茶だ。」

「番茶にしますか、それとも雁が音？」

「どつちだつて好い。」

「ぢや勿體ない番茶にしよう。」

須磨子は茶焙を取つて、コトコトはうじにかゝつた。

「けちな叔母さん。」

「だつてどつちだつて好いつて、叔父さんがさう云ふんだもの。」

「私そんな番茶なんか嫌だわ、其代り叔父さん敷島一本貫つて好いてせう、ねえ叔父さん。」

「好いともソラ！」

鐵彌は相變らず笑つて、袋ごと芳子に投げてやる。

「あよしつたら芳ちゃん、本當に毒だよ、先刻からもう散々吸つて、とつたばかりの白梅を五々みんなにしちまつたぢやないの。」